

大通公園を望む窓辺から

歌舞伎町・薄野・三六街

常任理事 林 宏一

道医師会に通勤(?)するようになって2年。それまで札幌は私にとって、全くと言って良い程無縁の街だった。学生時代の6年間と医局生活9年間の15年間で新宿を過ごした。もちろん、アパートは都内を3~4回転々としたが、通学には歌舞伎町の近くの路を毎日歩いていた。

札幌に理事会や行政との打ち合わせ等で頻回に来て、会合やたまに事務局職員と食事に行ったり、他理事と飲みに行ったりしていると薄野の丁目番地がいやが応でも徐々に頭に入って来る。薄野南5条に「新宿通り」という仲通があるのも程なく誰からか教わった。その名前のいわれは今も知らないけれど、いろいろな町にある「銀座通り」と同じことなのかと理解している。夜のこの通りは、歌舞伎町程混沌としてはいないが、それでも薄野のメイン通りの一つであり、適度な混雑感がある。深夜の1時過ぎは店がはけた女性やアルコール血中濃度のかかなり増加した人たちと肩がぶつかりそうになる。なぜか、何をしているのか若者たちも多い。何時ころになると閑散となるのか私は知らない。

三六街も旭川に戻って来るまでは、無縁の街だった。旭川駅より直結する平和通りは歩天の先駆地として有名だが、その通りの商店街は昔日の賑わった面影は今も無い。夜の三六街は、ある意味落ち着いた静かな佇まいである。客足が乏しいと言えばそれまでだが、たまに出歩くのも悪くない。閉店していても壁の看板ネオンには灯がともり、“枯れ木も山の賑わい”である。

街の顔も時の移りに相応し変化する。人の顔はなおさらである。自分の顔を鏡を見て、何と年老いて来たことか。白髪を染めても修正インキのように元に戻らない。これから先の変化には予想すつつかない。医療の世界も同じである。早く世代交代したいものである。

医師不足と地域医療

理事 齋藤 孝次

先日釧路にて、札幌医科大学脳神経外科三國教授に最新の脳神経外科手術のご講演をいただいた。覚醒下の脳機能温存手術などの最先端のお話で、その進歩には大変驚かされたところである。

その際先生は、地域医療枠で入った学生が卒業した場合、脳神経外科専門医になるための後期研修の施設(地域枠指定医療機関)が少なく数年遅れる結果となり、そのため脳外科医になる医師がさらに少なくなると危惧されていた。

北海道では脳卒中は脳神経外科で診療する体制となっており、公的・私的医療機関が連携して、脳卒中救急医療体制、脳卒中地域連携パス等、地域医療で大きく貢献している。しかし、研修医制度が始まってから脳外科(外科系全般)に進む人材が少なく困っている。北海道はこのような現実を知っていて、三大疾病の重要な脳血管障害を診る医療機関で地域医療に大きな貢献をしても、民間であれば地域枠指定医療機関になる資格はないと考えているのだろうか。地域医療は公的病院だけでまかなえるので民間は別と考えているのだろうか。

そもそも公的病院は経営が赤字でも税金等で補填され、公的医療支援を受けている。さらに医師不足の解消等も公的病院だけ優遇されて、それで良いのだろうか。大きな疑問を持つこのごろである。

私たちの法人も医師不足で大変困っている法人の一つであるが、地域医療に貢献しようとの間努力してきた。しかし、民間の努力は公的には評価されないのだろうか。これまでも民間の悲哀は常々感じるところがあったが、このようなことが続けば、モチベーションが下がってしまうのではと残り少ない医師人生を淋しく思ったりすることもある。しかし老人パワーが地域医療の重要な一部を担って成り立っているのだと心に言い聞かせ、笑って診療していこうと思っている。

東海大四は夢を与えてくれてありがとう。

